20121101 古典の日

千年近くも昔、たいそう読書好きの少女がいた。世は平安時代、書物は希少だ。少女は等身大の仏像を造り「あるだけの物語を全部読みたい」とひたすら願う。菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）と呼ばれる人で、その「更級（さらしな）日記」に愛書ぶりが詳しい▼上洛（じょうらく）し、憧れの源氏物語を全巻もらうと天にも昇る心地になる。「間仕切りの中に伏して一冊ずつ読む喜びといったら、后（きさき）の位も比ではない」と書き、「昼はずっと、夜は目の覚めている限り、灯を近くにともして」読みふけった。そんな少女が、喜んでいよう▼今年から、１１月１日が「古典の日」になった。１００８（寛弘５）年のこの日、源氏物語をめぐる記述が「紫式部日記」に初めて出てくる。それにちなんで法律で定めた。読書週間のほぼ真ん中、翌々日は文化の日と、日取りはいい▼文学の古典ばかりではない。音楽、美術、伝統芸能などを広くとらえて、歳月に朽ちない輝きに親しむ趣旨だという。汲（く）めども尽きない泉なのに、飲まず嫌いはもったいない▼とはいっても、とっつきにくいのが古典というもの。「桐壺（きりつぼ）源氏」という言葉があって、源氏物語を読み始めたが冒頭の「桐壺」の巻で投げ出すことを冷やかして言う。せっかくの日を尻すぼみにさせないために、親しみ、楽しむ工夫が大事になる▼源氏よりは通読者が多いだろう「徒然草」が言っている。〈ひとり、燈（ともしび）のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる〉。古典の醍醐味（だいごみ）を、古典が教えてくれる。

090323

政治家も大物になると、居所で呼ばれることがある。人と情報が集まる私邸は権力の代名詞だ。「目白」の田中角栄、それ以上の重量感で「大磯」の吉田茂である。ワンマン首相が愛した神奈川県大磯町の旧吉田邸がきのう、全焼した▼貿易商だった養父の別荘を、外国の賓客を招くために新増築した和風建築。総ヒノキで、京都の宮大工が手がけたという。いずれ県立公園として公開の予定だった▼大衆やマスコミが苦手な吉田は、これと見込んだ相手と話し込む政治家だった。座談のための奥座敷が大磯ということになる。在任中も週末はほぼ私邸で過ごし、門前の二階屋では総理番記者が来客に目を光らせたそうだ▼晩年も千客万来だった。三女で、現首相の母でもある麻生和子さんは「父の引退生活は、とにかくお客様が多かったのであまり寂しいというものではなかった」と著書に記している。要人の「大磯詣で」のほか、若手外交官や自衛官もよく招かれた▼「西日が差す」という大工の忠告を無視し、吉田は上階に大窓を抜く。客のない夕方など、これを額縁に富士山をじっと眺めていたという。臨終の日も窓際に寄り、秋空に映える霊峰を瞼（まぶた）にとどめた。昭和の裏面史を見聞きした障子や壁と共に、その母屋も焼け落ちた▼火事は命や財ばかりか、風景を奪い、思い出を灰にする。白いソファから窓外を見やる老人の写真を改めて手に取り、逆光の後ろ姿に不思議な喪失感を覚えた。炎があぶり出したのは、私たちが知らずに抱く「復興する日本」への郷愁だろうか。

091018新聞配達の少女

ご近所を歩くと、回収待ちの古新聞を戸口で見かける。弊紙であればもちろん、他紙でもお宅に一礼する癖がついた。無料の情報があふれる時代、新聞代を払ってくださる読者は社を超えて大切にしたい▼感謝の念はおのずと新聞を配る人にも向かう。日本の新聞の９５％は戸別配達されている。「新聞配達の日」のきょうは、日本新聞協会が募ったエッセーから紹介したい▼北海道苫小牧市の亀尾優希さん（９）は、母の新聞配りを手伝う。貧血気味のお母さんは団地の３階まで、娘は４階と５階。「家に帰ったら、お父さんのおべんとうにいれるたまごやきを作ります。こうして、わたしの一日ははじまります」。小さな働き者を真ん中に、固く結ばれた家族が浮かんでくる▼「インターネットでは得られない情報が、伝える人と届ける人の誠意の集大成として新聞になる」。そう書いてくれたのは、東京都文京区の岩間優（ゆう）さん（１４）だ。足の悪いお年寄りが新聞を心待ちにしていると知り、単なる「記事の集まり」を超えたぬくもりを感じたという▼人の手で運ぶ新聞が温かいのは自然なことかもしれない。今年の新聞配達の代表標語も〈宅配で届くぬくもり活字の重み〉である。凍える朝でも嵐の夕でもいい。情報の重い束を運ぶ４２万人に思いをはせたい▼新聞社はネットでも発信しているが、そこで再会するわが文は心なしか「誠意」を割り引かれている。特にコラムの場合、体裁の違いはそれほど大きい。どうか小欄は、ぬくもりを添えてお届けする「縦書き」でお読み下さい。

091106たばこ増税

国の台所事情がいよいよひどいことになってきた。今年度上半期の税収は前年同期より２４％減り、年度見通しも４６兆円から３０兆円台に修正されるという。火の車にせき立てられて、たばこ増税が浮上している▼販売が急減しては財政的に元も子もないから、たばこ税の引き上げは「小幅で何度も」が常だった。そのせいか、１箱平均６００円の欧米に比べ、日本のたばこは半額。禁煙の旗を振る厚労省は「しがらみのない政権なんだから」と大幅アップを狙う▼たばこ包囲網は狭まる一方だ。７００度の火が幼児の顔あたりを舞うとあって、歩きたばこの追放が各地に広まった。神奈川県では来春から、不完全ながら飲食店などでの喫煙が規制される▼真綿で絞められるように喫煙率は下がり続け、今春で２５％（男性３９％、女性１２％）。喫煙者が年に８０万人減った計算だ。つまり２兆円強のたばこ税は、より少数が、より高額を背負って支えている。日本たばこ産業は「罰金のような課税」とむくれる▼だがどうだろう。紫煙への依存は、ストレス解消とかの前にニコチン中毒という病である。だから値上げは体に良い、という理屈になる。本当に国民の健康を願うなら、財源が枯れるのを覚悟で１箱千円にしたらいい▼税収を案ずるなら、簡単にやめられない弱みに乗じ、取りやすい所からチマチマ取る姿勢はどうか。中毒などに頼らない、大きな構想がほしい。孫子の代を見据え、消費税や法人税、さらには歳出までを含めた財政の解体修理にかかる時だ。一服している暇はない。

20100105小沢神社」の威勢と周辺人口は、政界でも別格とみえる

初もうでの参拝者数は、神社仏閣の規模と格、周辺の人口で決まるようだ。大都市の有名どころに人が集まるゆえんだが、その数がまた、社寺の威勢の証しともなる。政治家も同じらしい▼１９８５年の元日、東京・目白台の田中角栄邸には夕刻までに約６５０人が訪れた。脳梗塞（こうそく）で倒れる２カ月前、闇将軍として迎えた最後の正月である。元日には２００人分を届けていたと、近所のすし店主が後に語っている。目白もうでは、派閥で動いた古い政治を象徴する景色だった▼四半世紀を経て、同じ絵を見た。元日、都下深沢にある小沢一郎・民主党幹事長の私邸には、１６６人の国会議員が訪れたという。衆参の定数の２３％が同じ門をくぐったことになる▼広い座敷で２度に分けて宴を催す盛況だった。「小沢神社」の威勢と周辺人口は、政界でも別格とみえる。それほどの人物が、年始参りの出欠で扱いを変えるとは思えないが、顔を出しておくのが無難と考えた議員は多かろう▼参院選を半年後に控え、小沢氏の剛腕と機略に頼る向きは多い。新人議員を引き連れた訪中もそうだが、「数は力」の理屈は旧田中派からの遺伝子かもしれない。数を増やしたうえで、民主党を純化された小沢軍団にする腹だろうか▼元日の各紙は氏の資金問題を大きく報じた。ご本人や議員たちが、「小沢もうで」にどんな御利益を念じているのかは知らない。厄よけにせよ必勝祈願にせよ、大政変後の新春らしからぬ旧態に戸惑いを覚える。頼みもしない料理が出てきた時の、あの違和感である。

20110529 世界記憶遺産

その絵は、照明のカンテラを提げて地底に降りる母子を描いている。父ちゃんはもう採炭場だ。母の肩には３人分の弁当、少年の背には赤ん坊。母がおんぶすると坑道の低い天井で頭を打つので、と説明文にある▼明治から昭和を生きた「炭鉱絵師」山本作兵衛は、石炭掘りの仕事と生活を活写した。きつい坑内作業、混浴の共同浴場、夫婦げんか。お互い命がけという連帯感と、家族労働が育む濃密な社会である。作兵衛の炭鉱絵が、ユネスコの「世界記憶遺産」に登録された▼幼少期から両親について福岡県の筑豊炭田で働いた。もともと絵心があり、現場を離れてから９２歳で没するまで、日記と記憶を頼りに千点以上を残した。素朴にして誠実な作品には、掘り道具が響き、汗が臭う▼「私の絵には一つだけうそがある。坑内は真っ暗で、こんなにはっきり見えやしません」。中小炭鉱の閉鎖が続く中、ヤマの実像と人情を孫の世代に伝えたい一念で、色までつけた▼記憶遺産には「アンネの日記」「フランス人権宣言」など、人類史に刻むべき文物が名を連ねる。炭鉱絵は、近代化を底辺で支えた人々を同じ目線で描いた点が評価された。日本から初めて、そうそうたる史料の仲間入りだ▼国宝とは無縁の「労働絵巻」が、一足飛びに世界公認のお宝になる痛快。年に２００升を空けた作兵衛のこと、地の底に消えた幾万の命と祝杯を交わしていよう。早くから絵の価値を認め、とうとう世界に発信した筑豊の人たちにも、乾杯。